

学位請求論文の内容の要旨

領 域	健康支援科学	分 野	健康増進科学
氏 名	中川 孝子		
(論文題目)	認知症高齢者のその人らしさを尊重したケアに関する研究		
主 査	和田 一丸		
副 査	中村 敏也		
副 査	藤田あけみ		
副 査	西沢 義子		
<p>【研究背景】</p> <p>わが国の認知症高齢者は急速に増加しており、認知症ケアではその人らしさを尊重したケアの重要性が述べられている。また、Kitwood (1997) が提唱した Person-centred Care は世界中に普及しており、その中心的概念は Personhood であり、日本では「その人らしさ」と訳された。しかし、「その人らしさ」は日本語特有の表現であり、日本独自の歴史や文化的背景の影響を受けており、Person-centred Care の Personhood と同一ではないと考える。また、「その人らしさ」は、明確な定義や概念がなく、個々のとらえ方により違いがあることが指摘されている。したがって、「その人らしさを尊重したケア」も明確でなく、ケア提供者個々の実践内容に違いがあることが考えられる。</p> <p>そこで、認知症高齢者の「その人らしさを尊重したケア」を明確にし、認知症ケアの実践における新たな知見を得るために、文献検討、認知症ケア専門士がとらえる認知症高齢者へのその人らしさを尊重したケアに関する研究、グループホームにおける「その人らしさを尊重したケア」の実態調査の3段階で研究を実施した。</p> <p>【研究 I : 「その人らしさを尊重したケア」に関する文献検討】</p> <p>1.目的: 「その人らしさ」や「その人らしさを尊重したケア」の内容を抽出する。</p> <p>2.方法: 「その人らしさ」「介護」「看護」「認知症」「終末期」「リハビリテーション」をキーワードとし、医学中央雑誌Web版と CiNii Articles を検索し、「その人らしさ」や「その人らしさを尊重したケア」の研究に限定した16の文献を分析対象とした。分析方法は、「その人らしさを尊重したケア」を表している文節や文章を抽出しコードとし、サブカテゴリー化、カテゴリー化した。</p> <p>3.結果: 68のコードから18のサブカテゴリー、さらに[生活習慣の支援][人生歴の把握][人や物との繋がりケア][環境調整][希望の成就][価値観の尊重][役割遂行の支援][能力のアセスメント]の8カテゴリーが抽出された。</p> <p>4.考察: 認知症ケア標準テキストの認知症ケアの原理・原則と比較すると、8カテゴリーはこれらの原理原則をすべて包括しており、認知症高齢者への「その人らしさを尊重したケア」の視点になり得ると考えられた。しかし、これらのケアは一般の対象者にも適応する内容であることから、認知症高齢者にさらに特徴的な「その人らしさを尊重したケア」があることが考えられた。</p>			

(注) 論文題目が外国語の場合は、和訳を付すこと。

【研究Ⅱ：認知症ケア専門士がとらえる認知症高齢者へのその人らしさを尊重したケアに関する研究】

1.目的：認知症ケア専門士がとらえている認知症高齢者の「その人らしさを尊重したケア」を明らかにする。

2.方法 1)対象者：グループホームで働いている認知症ケア専門士 21 名。**2)研究方法：**インタビューガイドに沿って半構造化面接を行った。**3)分析方法：**修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて質的に分析した。**4)倫理的配慮：**対象者に対して十分な説明と同意を行い、弘前大学大学院保健学研究科倫理委員会の承認を得て実施した。(整理番号：2015-039)

3.結果：14 の概念、4 つのカテゴリー〈個の重視〉〈思いの尊重〉〈強みへの働きかけ〉〈密な相互関係〉が抽出された(図 1)。概念を《 》、カテゴリーを〈 〉で示す。

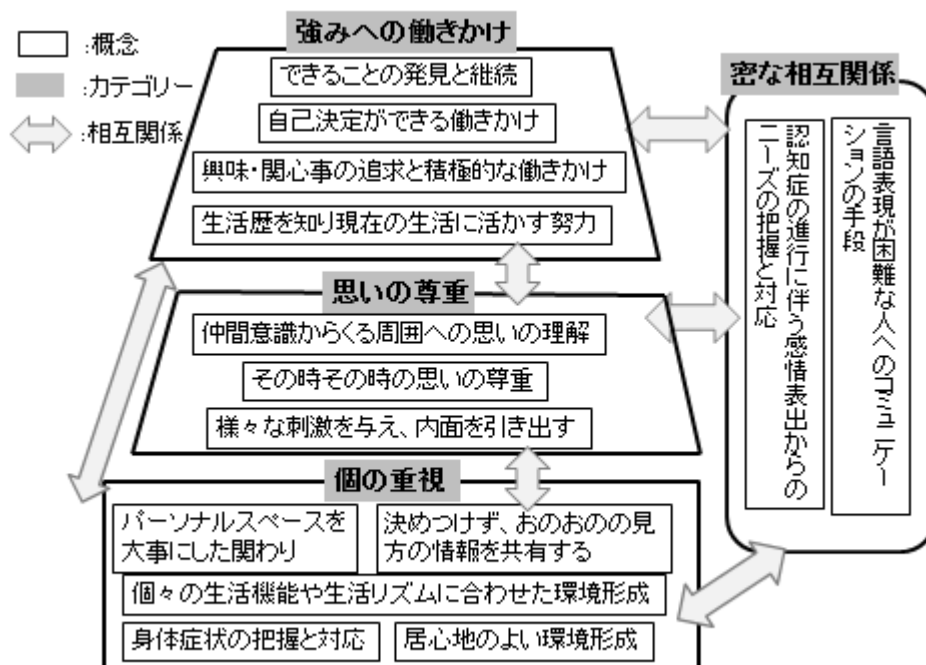


図1 認知症高齢者の「その人らしさを尊重したケア」

4.考察：14 の概念、4 つのカテゴリーと研究Ⅰで形成された 8 カテゴリーについて比較すると、[生活習慣の支援]は〈個の重視〉と、[人生歴の把握]は〈強みへの働きかけ〉と、[人や物との繋がり]は〈密な相互関係〉と、[環境調整]は〈個の重視〉と、[希望の成就]は〈強みへの働きかけ〉と、[価値観の尊重]は〈個の重視〉〈思いの尊重〉等と、[役割遂行の支援]は〈強みへの働きかけ〉と、[能力のアセスメント]は〈個の重視〉〈強みへの働きかけ〉等と類似性がみられた。このように、14 の概念、4 つのカテゴリーは、研究Ⅰで形成された 8 カテゴリーをすべて包含していた。さらに、4 つのカテゴリー間には相互関係が認められ、新たな認知症高齢者の「その人らしさを尊重したケア」として構造化することができた。

また、Person-centred Care は、V (value:価値を認める)、I (individualized approach:個人の独自性を尊重する)、P (perspective of the person:その人の視点に立つ)、S (social psychology:心理的ニーズを満たし、相互に支え合う社会環境を提供する) の 4 つの要素が同等に揃うことと定義されている。本研究で得られた〈個の重視〉〈思いの尊重〉〈密な相互関係〉は Person-centred Care の要素と類似性がみられたが、〈強みへの働きかけ〉の《自己決定ができる働きかけ》《できることの発見と継続》は Person-centred Care にはない新たな概念であった。

【研究Ⅲ：グループホームにおける「その人らしさを尊重したケア」の実態調査】

1.目的：研究Ⅱで得られた認知症高齢者の「その人らしさを尊重したケア」の認識と実施の実態を明らかにする。

2.方法 **1)対象者：**全国 329 か所のグループホームに依頼をし、研究同意の得られた 32 施設の職員 250 名である。**2)研究方法：**調査は郵送による質問紙法とした。質問紙の内容は、対象者の属性、研究Ⅱで明らかにした認知症高齢者の「その人らしさを尊重したケア」14 項目に関する認識と実施状況（4 段階尺度）、研究Ⅱで得られた〈密な相互関係〉の影響を確認するため共感性尺度改訂版（以下、EESR）20 項目を 7 段階で回答を求めた。EESR は得点化し両向型、共有型、不全型、両貧型に分類した。

3)分析方法：認識と実施の比較は Wilcoxon の検定で行った。また、実施と年齢および認知症ケア年数、研修参加回数（年間）共感経験タイプとの関係をみるために多重ロジスティック回帰分析を行った。そのために、認識と実施状況の 4 段階評価をあり、なしの 2 群とした。有意水準は $p < .05$ とした。**4) 倫理的配慮：**弘前大学大学院保健学研究科倫理委員会の承認を得て実施した。（整理番号：2017-006）

3.結果：質問紙配布数 250 部に対する回答者数は 217 名、回収率は 86.8%、そのうち有効回収率は 84.8%（212 名）であった。認識と実施の比較では、14 項目すべてにおいて認識よりも実施得点が有意に低く、特に〈思いの尊重〉や〈強みへの働きかけ〉のケアの実施が不十分であった。多重ロジスティック回帰分析の結果では、実施において認知症ケア経験年数との関連があったケアが 6 項目（オッズ比：1.101~1.195）みられた。具体的には、「3.個々の生活機能や生活リズムに合わせる」オッズ比：1.106）、「6.様々な刺激を与え内面を引き出す」（オッズ比：1.101）、「10.表情や目線等から興味・関心事を追求する」（オッズ比：1.195）等であった。実施において年齢と関連があったケアが 3 項目（オッズ比：1.042~1.078）で、具体的には「7.その時その時の思いを尊重する」（オッズ比：1.061）等であった。また、共感経験タイプの両向型（他者理解が最も高い共感性）と関連があった項目が、「6.様々な刺激を与え内面を引き出す」（オッズ比：0.218）であった。

4.考察：「その人らしさを尊重したケア」14 項目とも十分認識されていたが、実施は有意に低く、その影響要因として認知症ケア経験年数が考えられた。14 項目中 6 項目のオッズ比は 1.101~1.195 とやや高く、実施の有無に認知症ケア経験年数が少なからず影響していることが示唆された。この 6 項目は〈思いの尊重〉〈強みへの働きかけ〉のケアが多く、対象者への具体的な関わり方が難しく認知症ケア経験年数が実施に僅かに影響を与えている可能性がある。共感経験タイプの両向型の刺激を与え内面を引き出すケアの実施が低い傾向は、共感性が高いために対象者の思いを尊重するあまり、様々な刺激を与えることに戸惑いがあることも考えられる。また、本研究の対象者は認知症ケア専門士が少なく、困難事例に遭遇しても相談するキーパーソンがいないため、日々のケアに戸惑いを感じながら介護していることも考えられた。今後は介護職員のカリヤ形成のための教育プログラムの構築が必要であることが示唆された。

【まとめ】

1.認知症高齢者の「その人らしさを尊重したケア」は、〈個の重視〉〈思いの尊重〉〈強みへの働きかけ〉の過程で〈密な相互関係〉が確立され、それぞれのケアは相互のケアを振り返る等の相互関係がみられた。

2.〈強みへの働きかけ〉の《自己決定ができる働きかけ》《できることの発見と継続》は Person-centred Care にはない概念である。

3.認知症高齢者の「その人らしさを尊重したケア」は十分に認識されていたが、その実施度は認識度に比べ有意に低かった。特に〈思いの尊重〉や〈強みへの働きかけ〉のケアの実施が不十分であった。

【細則様式第 1 - 2 号続き】

学位論文のもととなる研究成果としての筆頭著者原著

論文題目	“Care That Respects Individuality” Provided to Elderly People with Dementia as Perceived by Japanese Dementia Carers Qualified
著者名	Takako Nakagawa, Akemi Fujita, Yoshiko Nishizawa
掲載学術誌名	Open Journal of Nursing
巻, 号, 項	Vol.7 No.11 of November 2017 1227~1245
掲載年月日	2017.11.17